

III. 研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の 編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
加藤知行	切除不能進行・再発大腸癌患者の初回化学療法例を対象としたフルオロウラシル／I-ロイコボリンとオキサリチブチニン併用療法(FOLFOX6)の臨床第Ⅱ相試験 Phase II Study of FOLFOX6(combination Chemotherapy of Oxaliplatin with infusional 5FU/I-Leuovorin) in Chemo-naive, Unresectable Metastatic / Advanced Colorectal Cancer.	島田安博、濱口哲弥、安井久晃	大腸がん肝転移症例の術後補助化学療法に関する研究(16281101)		東京	2004	2-36
加藤知行、安井健三、平井孝、金光幸秀	大腸癌肝転移に関する研究-大腸癌の肝転移に対する外科治療	監修：武藤徹一郎 編集：渡辺英伸、杉原健一、多田正大	大腸疾患 NOW 2004	(株)日本メディカルセンター	東京	2004	89-104
鮫島伸一、澤田俊夫	肛門扁平上皮癌の現況 (1) 第59回大腸癌研究会アンケート集計から	監修：武藤徹一郎 編集：渡辺英伸、杉原健一、多田正大	大腸疾患 NOW 2005	(株)日本メディカルセンター	東京	2005.1	129-134

<u>島田安博</u>	大腸癌化学療法の現況	監修：武藤徹一郎 編集：渡辺英伸、杉原健一、多田正大	大腸疾患 NOW 2005	(株)日本メディカルセンタ一	東京	2005	117-127
荒木靖三、白水和雄	経肛門的内視鏡下手術	杉原健一 編集	大腸・肛門外科の要点と盲点	(株)文光堂	東京	2004	206-208

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻名	ページ	出版年
Kanemitsu Y, <u>kato T</u> , Hirai H, Yasui K	Preoperative probability model for predicting overall survival after resection of pulmonary metastases from colorectal cancer.	British Journal of Surgery	191	2004	112-120
金光幸秀、 <u>加藤知行</u> 、平井 孝	大腸癌肺転移に対する治療の現況 -第 55 回大腸癌研究会アンケート結果-	日本大腸肛門病学会誌	57(3)	2004	121-131
加藤知行、平井 孝、金光幸秀	大腸癌の標準手術：結腸進行癌に対する標準手術	外科治療（癌の標準手術アトラス）	90	2004	98-108
加藤知行、平井 孝、金光幸秀	直腸高位前方切除術	手術	58(6)	905-912	2004
平井 孝、 <u>加藤知行</u> 、金光幸秀	特集：腹膜播種の診断と治療 II. 治療 6. 大腸癌腹膜播種性転移の治療とその成績	臨床雑誌「外科」	66(8)	921-925	2004

安井健三、清水泰博、 平井 孝、金光幸秀、 加藤知行	特集：転移性肝癌 どこまで challenge すべきか. I 大腸癌肝転 移の生物学的特. 2 大腸癌肝転移 の腫瘍辺縁形態と予後	臨床雑誌「外科」	66(13)	1610-1614	2004
加藤知行、平井 孝、 金光幸秀	大腸癌切除後のサーベイランスー 転移・再発を中心に I 総論（1）大腸癌の遠隔転移・ リンパ節転移再発に対する外科的 切除の実際	Early Colorectal Cancer	8(2)	99-108	2004
高橋進一郎、木下 平、 永井 完治、斎藤典男	特集：転移性肝癌 -どこまで challenge すべきか III.肝切除の工夫と成績 3.大腸癌肝・肺転移に対する切除	臨床雑誌「外科」	66(13)	1656-1660	2004
Hosokawa A, Yamada Y, Shimada Y, Muro K, Hamaguchi T, Morita H, Araake M, Orita H, Shirao K	Prognostic significance of thymidylate synthase in patients with metastatic colorectal cancer who receive protracted venous infusions of 5-fluorouracil.	Int J Clin Oncol	9(5)	388-392	2004
Goto A, Yamada Y, Hosokawa A, Ura T, Arai T, Hamaguchi T, Muro K, Shimada Y, Shirao K	Phase I/II study of irinotecan, 5-fluorouracil, and L-leucovorin combination therapy (modified Saltz regimen) in patients with metastatic colorectal cancer.	Int J Clin Oncol	9(5)	364-368	2004
Inokuchi M, Uetake H, Shirota Y, Yamada H, Tajima M, Sugihara K	Gene expression of 5-fluorouracil metabolic enzymes in primary colorectal cancer and corresponding liver metastasis	Cancer Chemother Pharmacol	53	391-396	2004
植竹宏之、飯田 聰、 角崎秀文、安野正道、 榎本雅之、杉原健一	特集/大腸・肛門疾患—最新の診断 と治療 転移性大腸癌の診断と治 療	臨床と研究	81(9)	1418-1421	2004

Shimada H ,Tanaka K, Masui H, Nagano Y, Matsuo K, Kijima M, Ichikawa Y , <u>Ike H</u> , Ohki S, Togo S.	Results of surgical treatment for multiple (≥ 5 nodules) bi-lobar hepatic metastases from colorectal cancer.	Langenbecks Aech Surg	389	114-121	2004
Ota M, Shimada H, Masui H, Tanaka K , Yamaguchi S, Ichikawa Y, Togo S, <u>Ike H</u> , Oki S	Adjuvant Hepatic Arterial Infusion Chemotherapy after Curative Resection for Dukes C colorectal cancer : A Pilot Study.	Hepato-Gastroenterology	51	124-127	2004
Takayama O , Yamamoto H , Ikeda H, Ishida H , Kato H, Okuyama M, Kanou T , Fukunaga M, Tominaga S,Morita S, Fujita Y , Fukunaga H, Ikenaga M,Sekimoto M, <u>Ohue M</u> ,Kikkawa N, Monden M.	Application of RT-PCR to clinical diagnosis of micrometastasis of colorectal cancer: A translational research study	Int J Oncol	25	597-604	2004
Ogawa M,Yamamoto H , Nagano H,Miyake S , Sugita Y,Hata K , Kim BN ,Ngan CY , Damdinsuren B, Ikenaga M, Ikeda M , <u>Ohue M</u> ,Nakamori S , Sekimoto M,Matsuura N, Monden M	Hepatic expression of ANG2 RNA in metastatic colorectal cancer.	Hepatology	32(9)	528-539	2004

山本浩文、熊浦真吾、 高山 治、小川 稔、 安居昌義、萬井真里子、 畠 泰司、池永雅一、 池田正孝、 <u>大植雅之</u> 、 関本貢嗣、門田守人	NO 大腸癌における免疫染色による 微小転移検出の利点と欠点。	外科治療	90(1)	77-83	2004
<u>Hideyuki Mishima</u> , Takeshi Kato, Mieko Yanagisawa, Toshimasa Tsujinaka, Isamu Nishisho, Masaki Tsujie, Kaori Fujimoto-Ouchi Yutaka Tanaka Nobuteru Kikkawa	Sequential Treatment with Irinotecan and Doxifluridine: Optimal Dosing Schedule in Murine Models and in a Phase I Study for Metastatic Colorectal Cancer.	Chemotherapy	51	32-39	2005
棚田 稔、 久保義郎、 石崎雅浩、 青儀健二郎、 栗田 啓、 高嶋成光	大腸癌肝転移切除後長期生存例 の検討	癌と化学療法	31(11)	2004	1659-1661
Kuniaki Shirao , Atsuhi Ohtsu, Hideho Takada, Yasushi Mitachi, Kosei Hirakawa, Noboru Horikoshi, <u>Takeshi Okamura</u> , Koichi Hirata, Soh Saitoh , Hiroharu Isomoto, Atsushi Satoh	Phase II Study of Oral S-1 for Treatment of Metastatic Colorectal Carcinoma.	Cancer	100(11)	2355-2361	2004

岩下生久子、牛尾恭輔、 岩下明徳、植山俊彦、 平賀聖久、村中 光、 宇都宮 尚、上田真信、水 口昌伸、宮川国久、 下田忠和、井野彰浩、 下田悠一郎、西山憲一、今 村健三郎、岡村 健、 村上純滋、一瀬幸人、 渡辺秀幸	7. 消化管への転移性腫瘍の診断	胃と腸	39(4)	647-662	2004
Mori S, Ogata Y, <u>Shirouzu K</u>	Biological features of sporadic colorectal carcinoma with high-frequency microsatellite instability: special reference to tumor proliferation and apoptosis.	Int J Clin Oncol	9	322-329	2004

IV. 研究成果の刊行物・別刷

平成 16 年度厚生労働科学研究費補助金 第三次対がん総合戦略研究事業
がん臨床研究事業
大腸がん肝転移症例の術後補助化学療法に関する研究班

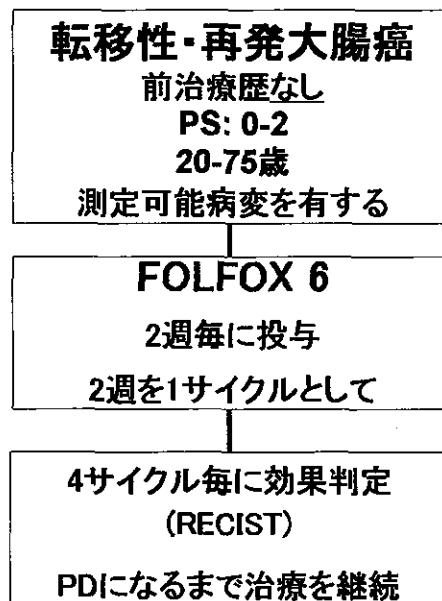
**切除不能進行・再発大腸癌患者の初回化学療法例を対象とした
フルオロウラシル/リ-ロイコボリンとオキサリプラチン併用療法
(FOLFOX6)の臨床第Ⅱ相試験**

目 次

0. 概要.....	41
1. 背景.....	43
2. 試験の目的とエンドポイント.....	45
3. 症例選択条件.....	46
4. 説明と同意.....	47
5. 登録.....	48
6. 治療計画.....	49
7. 予期される有害反応.....	53
8. 併用療法／支持療法.....	59
9. 評価項目と評価のスケジュール.....	60
10. 腫瘍縮小効果の判定.....	61
11. 対象集団とエンドポイントの定義.....	64
12. 統計学的事項.....	65
13. 倫理的事項.....	66
14. 記録用紙の種類と送付時期.....	68
15. 有害事象の報告.....	69
16. 試験の実施期間.....	71
17. 研究組織.....	72
18. 研究結果の発表.....	74
19. 参考文献.....	75

0 概要

0-1 シェーマ



0-2 目的とエンドポイント

0-2-1 目的

切除不能進行・再発大腸癌に対する国際的標準治療のひとつであるオキサリプラチン併用5-FU/L-LV療法(FOLFOX6)の日本人における腫瘍縮小効果(奏効率)ならびに安全性を評価する。

本試験により、国際的標準治療のひとつであるFOLFOXの国内臨床現場への早期導入を行う。

また、この試験成績に基づき、大腸癌肝転移治癒切除後症例に対する再発抑制効果を検証する第Ⅲ相試験のための基礎データとする。

0-2-2 エンドポイント

主要評価項目(Primary endpoint)

奏効率

副次的評価項目(Secondary endpoints)

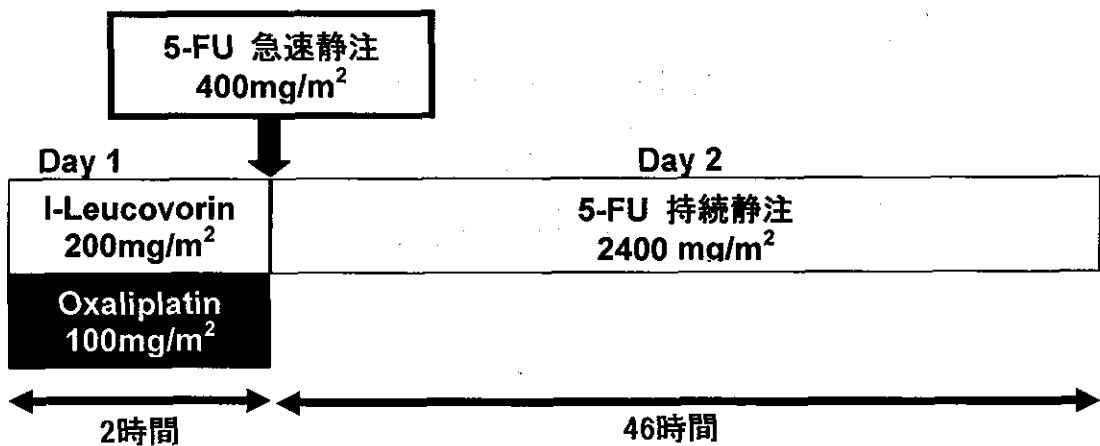
安全性、無増悪生存期間、生存期間

0-3 対象

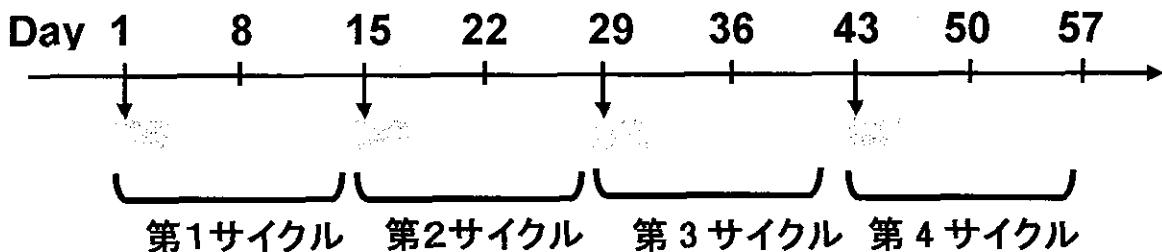
- 1) 組織学的に腺癌が確認されている。
- 2) 治癒切除不能な進行・再発大腸癌(虫垂、肛門管癌を除く)症例である。
- 3) 登録時の年齢が20歳以上75歳以下である。
- 4) PS(ECOG)が0、1、2のいずれかである。
- 5) 測定可能病変を有する。
- 6) 前治療として他癌腫を含め一切の化学療法が行われていない。但し、6ヶ月以前に終了した術後補助化学療法は前治療に含めない。
- 7) 主要臓器機能(骨髄、心、肝、腎)が十分に保たれていること。
- 8) 試験参加について患者本人から文書にて同意が得られている。

0-4 治療

<=====第1日=====><=====第2日=====>



上記を2週毎に施行し、2週間(1回投与)を1サイクルとする。増悪確定まで繰り返す。プロトコール治療終了以後の治療は規定しない。



0-5 予定登録数と研究期間

予定登録数：45例

登録期間：6ヶ月：2005年4月から2005年9月

追跡期間：2年

総研究期間：3年

1 背景

1-1 本研究班における FOLFOX6 療法第 II 相試験の位置づけ

本研究班の目的は、臓器転移(肝転移)を伴う大腸癌治癒切除例に対する術後再発抑制を目指して、新規抗癌剤であるオキサリプラチニと5-FU+LV(FOLFOX6療法)の臨床的有用性を検証することである。しかしながら、第III相比較試験を実施する前に、以下の2点につき検討することが必要であると判断した。

- 1) FOLFOX6療法の国内臨床現場での実施可能性の検討
- 2) 肝切除症例におけるFOLFOX6療法の術後投与の安全性の検討

このため、1)については、切除不能進行・再発大腸癌を対象として第II相試験を実施し、奏効率、安全性を中心に検討をおこなう。2)については肝切除後の症例を対象として、第III相試験を実施し、その最初の40例程度(FOLFOX6群として)で肝切除後症例でのFOLFOX6療法の安全性を確認する。これら両者の結果を基に手術単独群を対照群とした第III相試験を実施することとした。

本臨床第II相試験計画書は、上記1)の検討を実施するために計画された試験であり、薬剤承認後に可及的速やかに試験開始を行う。第II相試験実施期間中に、本研究班の主試験である第III試験の計画・作成を行い、本研究班の最終目的である、臓器転移を伴う大腸癌治癒切除例に対する術後再発抑制がFOLFOX6療法により実現できるか否かを検証する。

1-2 切除不能進行・再発大腸癌に対する標準治療と国内の現状

2000年に、5FU/LV vs CPT-11+5FU/LV の2つの大規模な第III相試験で、first lineにおけるCPT-11+5FU/LV の優越性を示す論文が発表された。アメリカの Saltz らは、未治療切除不能進行・再発大腸癌に対して、5FU/LV(Mayo レジメン: 5FU を急速静注で投与する)に CPT-11 を加えたレジメン(IFL)について比較試験を行った¹。ヨーロッパでは Douillard らが、de Gramont レジメンまたはAIO レジメン(両者とも 5FU の持続静注が主体)とこれらに CPT-11 を併用した方法との比較試験を行った²。いずれも奏効率、無増悪生存期間の中央値、生存期間の中央値いずれも CPT-11 併用群が優れていた。これらの結果をもって、欧米では CPT-11+5FU/LV が切除不能進行・再発大腸癌の 1st line therapy の標準治療となつた。

2002 年 ASCOにおいて、N9741 trial の結果が発表され、CPT-11 + 5-FU/LV (IFL)、オキサリプラチニ+ 5-FU/LV (FOLFOX4)、L-OHP + CPT-11 (IROX)の3群比較において、オキサリプラチニを含む FOLFOX4 が奏効率、無増悪生存期間、生存期間の中央値のいずれにおいても他の治療法より優れており、かつ蓄積性の神経障害を認めるものの、総じて高度な毒性が少ないことが示された^{3,4}。この試験の結果などをもって、現在欧米では FOLFOX4 が標準治療のひとつと考えられるようになった。

しかしながら、FOLFOX4 レジメンは、day1 にオキサリプラチニ 85mg/m² の点滴静注(2 時間)、day1 と day2 に Leucovorin 200mg/m² の点滴静注(2 時間)と 5-FU 400mg/m² の急速静注、引き続き 22 時間の 5-FU 持続静注 600mg/m² を行うという複雑な投与方法のため、外来治療として行うには現実的に難しいと考えられる。Maindrault-Goebel らは、FOLFOX4 を改良し、day1 にオキサリプラチニ 100mg/m² と Leucovorin 400mg/m² の点滴静注(2 時間)、5-FU 400mg/m² の急速静注を行い、引き続き 46 時間の 5-FU 持続静注(2400mg/m² で開始し、毒性により 3000mg/m² に增量)を行うという、より簡便な FOLFOX6 レジメンを開発した⁵。携帯用ポンプを用いることにより、外来治療が可能である。FOLFIRI-FOLFOX sequence study の FOLFOX 6 群 118 例における主な Grade 3 以上の有害事象は、好中球減少 44%、血小板減少 5%、恶心 3%、嘔吐 3%、下痢 11%、神経毒性 34% であり、血液で毒性による治療関連死亡が 1 例みられた⁶。FOLFOX4 の改良、簡易スケジュールとして、FOLFOX6, 7 などが検討され、最近ではこれらを FOLFOX4 に置き換えて併用療法の検討や、比較試験が計画されている。^{7,8}

また、すでに海外において MOSIC 試験の結果、Stage III 結腸癌術後補助療法として FOLFOX4 が FU+LV と比較して優れる成績が報告され、オキサリプラチニの臨床的意義が確立されている。⁹

一方国内においては、FOLFOX 療法において使用されている infusional 5FU+LV のスケジュール

およびオキサリプラチンが 2004 年8月時点では承認されていない。しかし、厚生労働省の抗がん剤併用療法に関する検討委員会によりinfusional 5FU+LVについて、de Gramont 法、AIO 法が事前評価を終了し、製薬企業の承認申請により保険承認される予定となった。保険承認までの期間は特定療養費の適応(患者3割負担)として使用が可能である。また、国内承認が大幅に遅れていたオキサリプラチンについても 2004 年2月に国内承認申請が行われ、2005 年始めには遅くとも承認され、同様に特定療養費の適応することで薬価収載前に試験開始が可能となる。

2 試験の目的とエンドポイント

2-1 目的

切除不能進行・再発大腸癌に対する国際的標準治療のひとつであるオキサリプラチン併用5-FU/L-LV療法(FOLFOX6)の日本人における腫瘍縮小効果(奏効率)ならびに安全性を評価する。この試験成績に基づき、大腸癌肝転移治癒切除後症例に対する再発抑制効果を検証する第Ⅲ相試験の重要な参考成績とする。

2-2 エンドポイント

主要評価項目

奏効率

副次的評価項目

安全性

評価項目ではないが、以下の項目も探索的に検討する：無増悪生存期間、全生存期間

3 症例選択条件

以下の適格規準をすべて満たし、除外規準のいずれにも該当しない患者を登録適格例とする。

3-1 適格規準

- 1) 組織学的に腺癌(虫垂、肛門管癌を除く)が証明されている。
- 2) 治癒切除不能な進行・再発大腸癌(虫垂、肛門管癌を除く)症例である。
- 3) 登録時の年齢が 20 歳以上 75 歳以下である。
- 4) PS(ECOG)が 0、1、2 のいずれかである。
- 5) RECIST での測定可能病変を有する。スライス幅 10mm 以下の CT スキャンまたは MRI にて 1 方向測定が可能な長径 20mm 以上の測定可能病変が 1 つ以上存在する。ただし、局所再発のみおよび腹膜再発のみの場合は適格としない。
- 6) 前治療として他癌腫を含め一切の化学療法が行われていない。但し、6 ヶ月以前に終了した大腸癌術後補助化学療法は前治療に含めない。放射線治療は許容する。
- 7) 登録前 1 週間以内の測定データが下記を満たす。

① 白血球数	: 4,000–12,000/mm ³
② 血小板数	: 100,000/mm ³ 以上
③ 総ビリルビン	: 1.5mg/dL 以下
④ GOT (AST)	: 100U/L 以下
⑤ GPT (ALT)	: 100U/L 以下
⑥ 血清クレアチニン	: 1.1mg/dL 以下
- 8) 試験参加について患者本人から文書にて同意が得られている。

3-2 除外規準

- 1) 活動性の重複がん(同時性重複がんおよび無病期間が 5 年以内の異時性重複がん。ただし局所治療により治癒と判断される Carcinoma in situ(上皮内癌)または粘膜内癌相当の病変は活動性の重複がんに含めない)を有する。
- 2) 38℃以上の発熱を伴う、活動性の感染症を有する。
- 3) 末梢感覺器系の神經障害を有する。
- 4) 水様性の下痢を認める。人工肛門造設例においては、日常生活に支障のある下痢を認める。
- 5) 症状のある脳転移を有する。
- 6) 登録前 7 日以内に、輸血、血液製剤および G-CSF 等の造血因子製剤の投与を受けている。
- 7) 心電図検査にて治療を要する異常所見を有する。
- 8) 重篤な合併症を有する(腸管麻痺、間質性肺炎または肺線維症、コントロール困難な糖尿病、心不全、治療を要する虚血性心疾患など)。
- 9) 妊娠中・妊娠中の可能性がある・授乳中の女性、または避妊する意思がない。
- 10) 精神病または精神症状を合併しており試験への参加が困難と判断される。
- 11) ステロイド剤の継続的な全身投与(内服または静脈内)を受けている。
- 12) フルシトシン、フェニトイイン、ワーファリンの継続使用が必要な症例。
- 13) その他、担当医が本試験の対象として不適当と判断する症例。

4 説明と同意

4-1 被験者の同意

担当医は、登録前に同意説明文書・同意書に基づき、試験の内容などを被験者に説明し、文書により自由意志による被験者の同意を得る。担当医並びに被験者は、同意書に署名及び日付(説明日・同意取得日)を記載する。

同意説明文書・同意書(写)を被験者に渡すとともに、原本をカルテに保管する。

4-2 同意説明文書・同意書による被験者への説明事項

同意取得に際し、13-2 インフォームドコンセントに基づき、同意説明文書・同意書を用いて説明する。

5 登録

登録に先立って、担当医は「登録適格性確認票」の各項目を記入し、適格性を確認した上で事務局にFAXまたは電話で連絡する。研究事務局は適格性の確認後、登録番号を発行し、「登録確認通知」を担当医宛にFAXまたは電話で連絡する。担当医は登録番号の発行を確認してから、登録後すみやか(原則として1週間以内)に治療を開始する。「登録確認通知」はカルテ内に保管する。

事務局:国立がんセンター中央病院 島田安博、濱口哲弥、安井久晃

TEL:03-3542-2511(内線PHS:7056, 7375または7388)

FAX:03-3543-5255

登録時間:月～金 8:30～18:00

なお、投与量については、事務局にて計算して「登録確認通知」に記載して担当医に連絡する。急ぐ場合には研究事務局から担当医に電話連絡を行う。担当医は投与量を再確認して、投与を実施すること。

6 治療計画

6-1 使用薬剤（詳細は巻末の添付文書を参照）

Oxaliplatin: オキサリプラチニン（ヤクルト本社）100mg/vial

Fluorouracil: 5-FU®（協和発酵）250mg/5ml/ample

L-Leucovorin: アイソボリン®（ワイズ）25mg/vial

6-2 プロトコール治療

※2 サイクル目までは、最低週一回の外来通院にて安全性を確認する。

6-2-1 薬剤投与量

6-2-1-1 薬剤投与量レベル

本試験は、臨床現場での受け入れを考慮し、FOLFOX4より投与の簡便なFOLFOX6の投与スケジュールを採用することとした。

Tourigand の RCT(GERCOR)から投与量を下表のように設定し、「標準 LEVEL」より試験を開始する。⁶国内では、本レジメンでの経験はないため、まず6症例にて安全性を検討し、妥当と判断された場合には、「標準 LEVEL」で症例追加を行なう。「標準 LEVEL」6症例の検討によりに「標準 LEVEL」での安全性に問題があると判断された場合には(6-2-1-2 参照)、「-1LEVEL」において新規6症例で同様の検討を行ない、妥当と判断された場合には、「-1LEVEL」で症例追加を行なう。「-1LEVEL」でも安全性に問題があると判断された場合には、試験デザインの再検討を行なう。なお、第2サイクル以降は、投与毎に有害事象を検討し、投与・減量規準に則って治療を継続する。

【投与量 LEVEL】

投与量 LEVEL	オキサリプラチニン (mg/m ²)	5-FU 急速静注 (mg/m ²)	5-FU 持続静注 (mg/m ²)	アイソボリン (mg/m ²)
標準	100	400	2400	200
-1	85	400	2400	200

6-2-1-2 安全性の評価方法

標準 LEVEL で6症例に投与する。6 症例全例の第 3 サイクル day 8までの観察が終了した時点で以下の判断を行なう。

6症例中3例に下記の DLT 相当有害事象が認められた場合は「標準 LEVEL」は妥当でないと判断する。

6症例中 2 例以下であれば、「標準 LEVEL」で症例追加してよいと判断する。

なお、6症例の評価終了まで、新規症例の登録は行なわず、「標準 LEVEL」の妥当性が判定された時点で、予定症例数まで連続的に症例登録を実施する。この際、参加施設を増やす。

6-2-1-3 DLT 相当有害事象の定義

- 1) Grade4 の好中球減少が 5 日以上持続。その間、G-CSF を使用した場合は DLT 相当有害事象と判断する。
- 2) Grade4 の好中球減少を伴う 38°C以上の発熱
- 3) Grade4 の血小板減少または出血傾向を認める Grade3 の血小板減少
- 4) Grade3 の非血液学的毒性。ただし、恶心、嘔吐、食欲不振、倦怠感、便秘、血清電解質異常は除く。
- 5) 第 2 および第3サイクルの投与が 8 日以上遅れた場合。

毒性の評価には、NCI-CTCAE v3.0 日本語訳 JCOG 版¹⁰を用いる。神経障害(感覚性)については、下記の DEB-NTC(Neurotoxicity Criteria of DEBIOPHARM)で判定する。

項目	Grade			
	0	1	2	3
感覚異常 ／知覚異常	異常なし	末梢神経症状の発現 ただし、7 日未満で消失	7 日以上持続する末梢神経症状 ただし、機能障害はない	機能障害の発現

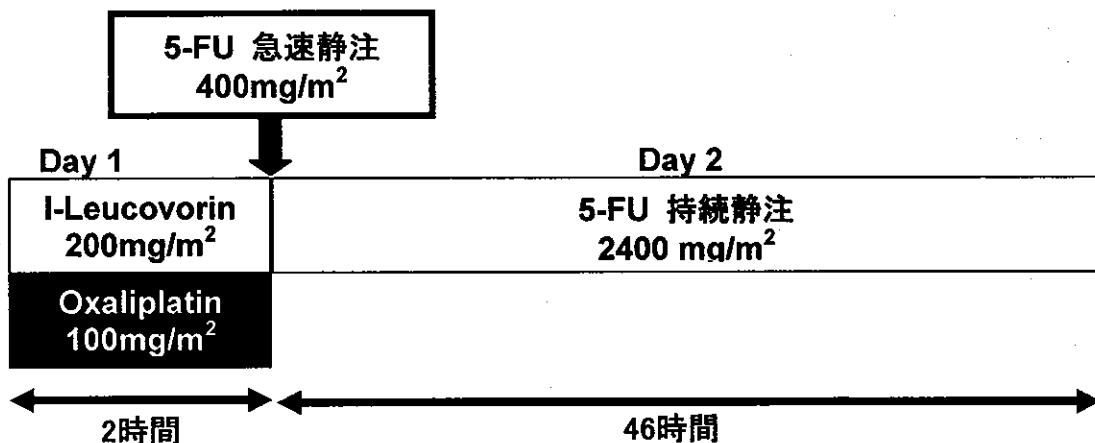
6-2-2 本試験の中止

「-1LEVEL」でも安全性に問題があると判断された場合には、試験デザインの再検討を行なう。

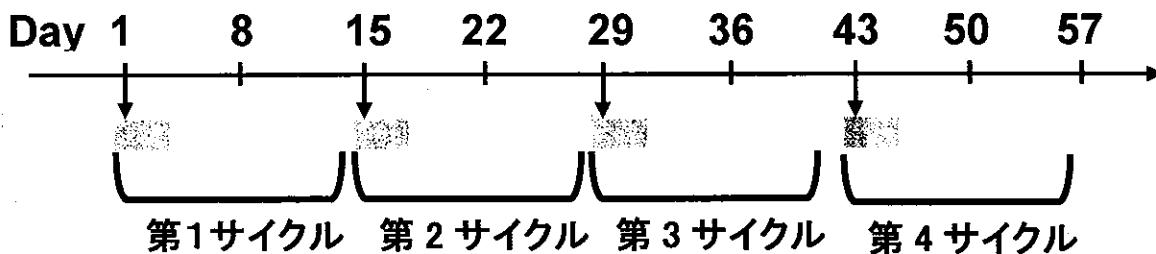
6-2-3 投与方法

オキサリプラチン、5-FU、アイソボリンの投与経路はそれぞれ静注とする。下図のとおり投与を行う。各薬剤の投与量は、研究事務局からの登録確認票に従う。

<=====第1日===== > <=====第2日===== >



上記を2週毎に施行し、2週間(1回投与)を1サイクルとする。その後の投与継続は中止規準まで繰り返す。投与開始の間隔は少なくとも2週間以上とする。後治療は規定しない。



● オキサリプラチン

5%ブドウ糖溶液 250ml ボトルから、オキサリプラチン 100mg バイアルあたり 50ml の 5%ブドウ糖液をシリンジを用い抜き取り溶解させる。必要量を残った 5%ブドウ糖溶液 250ml のボトルに加える。輸液ポンプを用いて 120 分で点滴静注する。急性神経障害である咽頭喉頭感覚異常や呼吸困難感(呼吸機能自体には影響を与えない)が出現した場合は(発現率は 1~2%)、次投与よりオキサリプラチンを 6 時間かけて投与する。5FU、アイソボリンの投与時間は変更なし。具体的には、オキサリプラチンと5FU が同時に投与されないように、オキサリプラチン投与開始 4 時間後にアイソボリン投与を開始し、オキサリプラチンとアイソボリンの投与終了時に 5FU の急速静注及び持続静注を実施する。

● アイソボリン

5%ブドウ糖溶液 250ml に溶解し、オキサリプラチンと同時に開始し、輸液ポンプを用いて 120 分で点滴静注する。(オキサリプラチンとは別ボトルとする)

● 5-FU 急速静注

5-FU(原液)を、アイソボリン投与終了直後に 3 分間程度の急速静注または生食 50ml に混じて全開点滴する。

● 5-FU 持続静注

5-FU 急速静注後、引き続き、5-FU を 46 時間かけて持続静注を行う。ディスポーザブルインフューザーまたは輸液ポンプで投与する。46 時間での点滴を目標とするがディスポーザブルインフューザーを使用する場合は投与時間が遅延する可能性があるため、開始時間と終了時間を記